

言語論的転回以降の東アジア仏教研究の試み

師 茂 樹

はじめに

仏教学に限らず、学術研究における方法の選択は、存在や実在についての考え方、世界観、言語観、歴史観などの諸前提を決定することにほかならず、したがって（間接的な）思想の表明であると言える^①。仏教学の多くが依拠する文献学もまた、多くの諸前提があり、それはヨーロッパにおける宗教改革とも連動した大きな思想的な流れの一部と言える。

近代以降の日本の仏教学は、明治期に輸入されたヨーロッパの文献学をその方法的支柱の一つとして^②いる。よく知られているようにヨーロッパの文献学は、グーテンベルクによる印刷技術の発明と、それに連動した宗教改革における「ただ聖書のみ」という原理、そしてそれを裏付けるための聖書の「オリジナル」の探求など、宗教的、メディア論的な背景を有する。こ

のような由来を持つ文献学を用いて、それとは異なる伝統を持つアジアの思想的文献を読解しようという営みは、それ自体が一つの比較思想的態度である。

文献学に比較思想的要素が含まれるからといって、文献学があれば比較思想的な研究が必要ないということにはならない。日本の仏教学が、文献学の持つ「厳密性」「実証性」「客観性」などによってこれまで大きな足跡を残してきたのは間違いないが、一方でそればかりに固執することで見落としてきたことも多いと思われる。特に、右にあげたような文献学の思想的背景に対する批判的な視点の乏しさが、比較思想を含めた研究方法の多様性とそれによる方法論の相対化に関心が薄いことにもつながっているように思われる。グローバル化をはじめとする今日の研究環境をふまえれば、自然科学における科学哲学のように、あるいは文学研究における文学理論、歴史研究における歴

史哲学などのように、仏教学の方法論を批判的に論ずる「仏教学の哲学」あるいは「文献学の哲学」^③がますます必要とされているのではないだろうか。そしてそこでは、比較思想研究的な視点が要請されるであろう。

本発表では、言語論的転回以降の仏教研究における方法論的問題に注目しながら、多様な方法論の可能性について考えた。

一 言語論的転回以降の文献学

よく知られているように、二十世紀における所謂「言語論的転回 (Linguistic turn)」は、思想史を含む歴史叙述の「客観性」に疑問を投げかけ、その物語性あるいは言語による構築性に注意を促した。文献学に基づく思想史研究が前提としてきた、文献資料を厳密に読解することによって歴史的事実(としての著者の思想)に到達しよう、という素朴実証主義的な信念はその土台を脅かされ、ヨーロッパ中心の哲学的研究が前提としてきた(各テキストを超えた)真理の普遍性もまた相対化を余儀なくされることとなった。

これまで「龍樹の空思想とデリダの脱構築の比較」のような比較研究は少なからず行われてきたし、言語論的転回的な色彩の強い井筒俊彦の所謂「東洋哲学」は仏教研究者への影響が少なくない。しかし、ベルナル・フォールや下田正弘の研究をはじめとするいくつかの例外を除けば、仏教学の方法論の問題

としてポストモダン哲学などの考え方が導入されたことはほとんどなかったように思う。最近では所謂「新しい実在論」などによって、言語論的転回(あるいは構築主義やポストモダン哲学)的な考え方もまた様々に批判されているが、文献学をはじめとする仏教研究が、人間による言葉の解釈を中心とした実践である以上、言語論的転回の可能性はまだ失われていないようにも思われる。

筆者は、東アジア仏教論理学の形成の分析を試みた研究^④なかで、以下のような方法論的な試みを行った。

① 論理学という非歴史的な真理を扱う分野の議論が、高僧伝などの歴史叙述によって支えられていた点を明らかにしようと試みた。これは、フッサール『幾何学の起源』とそれに対するデリダの注釈で議論されている「起源への遡行(の不可可能性)」の問題を前提としている。玄奘三蔵が作ったとされる論証式(唯識の証明⇨唯識比量)は、そもそも玄奘が作ったのかわからないうえ、その論理的な意味についても、玄奘伝をはじめとする歴史叙述や、それに影響された後世の注釈によって解釈に左右されており確定することが難しい。文献学的な「オリジナル」の探求が難しい問題である^⑤。

② 玄奘伝をはじめとする歴史叙述が、人物を通して過去にアクセスするとともに、その生を現在において生き直す、という宗教的実践(ヘイドン・ホワイトの言葉を借りれば「実用的な過去」)であったことを明らかにしようとした。ここで

は、言語論的転回以降の歴史学において提起された「もし過去が言語による構築物に過ぎないなら、それを倫理的対象としてどのように措定するか」という問題に対し、北條勝貴が提唱した「人物伝的歴史理解」の議論^⑧をふまえている。

③ 論理学をめぐる論争史の研究ではあるが、同時代のコンテクスト（仏性論争、空有の論争、戒律の解釈など）を幅広く参照して、その歴史的な位置づけを明らかにしようとする試みだ。ここではS・トゥールミンとA・S・ジャンニクのコンテクスト還元主義的な思想史研究方法と、それを批判的に検討したドミニク・ラカブラの方法論を参照している^⑨。これは後述するデジタルヒューマニティーズの問題系にも接続する。

言語論的転回以降の歴史学の立場からすれば、言うまでもなく本書もまたナラティブによる実践の一つである。「あとがき」において述べているように、本書は「過去の研究史、現在の学界の状況や人文学等の課題、『改革』が叫ばれる高等教育の現状など、さまざまなコンテクスト」や「因明の研究が現在でもナシヨナル・アイデンティティなどと結びついた政治的実践と隣り合わせである」という状況のなかで「生存戦略」として行われている実践である。

二 デジタルヒューマニティーズが喚起する 方法論的議論

言語論的転回以降の東アジア仏教学を考えるためには、デジ

タルヒューマニティーズ（DH）の動向を無視することはできない。電子テキストが間テクスト性のような批評理論等を顕在化させることについては、WWWの普及する以前からすでに（やや楽観的に）注目されていた^⑩。下田正弘は、DHによってもたらされる人文学の方法論的な意義について①資料のデジタル化による領域横断的な研究の可能性、②人文学の方法を人文学者に自覚的に記述させること、③テクスト研究に対する原理的反省（間テクスト性など）の契機となること、をあげる^⑪。ここでは比較思想研究との関連が深い①について検討したい^⑫。

コンピュータを用いた分析方法は、適当なモデルとツールがあれば、どのような種類の文献であれ、分け隔てなく適用できてしまう。従来、研究対象はその方法と密接に結びついていたが、数理的な研究方法はその領域性を解体する傾向があり、文献を仏典などに限定するのは研究史的な要請もしくは研究者の恣意でしかない^⑬。

これに関連して文学研究においては、DHの手法を用いた、比較文学研究とは異なる「世界文学」研究が提案されている^⑭。フランコ・モレッティの言う「世界文学」とは、世界全体を単一のシステムとして捉えようとするイマニュエル・ウォーラステインの「世界システム理論」や、生物全体の歴史を樹形図で記述しようとしたダーウィンの進化論などにならない、ある時代の文学史的な事象を世界全体で捉えようとする試みである。そのためには、一つ一つの文学作品、特に正典（canon）を精

読 (close reading) する従来の研究スタイルとは異なり、ある時代に書かれた正典以外も含む文学テキスト群全体をデジタルデータを用いて比較したり、登場人物間のネットワーク分析⁽¹⁶⁾を行ったりする世界システム理論の分析方法の応用や、DH的な手法を使ったアプローチを行う遠読 (distant reading) という方法が提案されている。この方法もまた批判が多いものであるが、精読を否定するのではなく、分業するためのものであるという。

仏教学においては依然として正典の精読やそれに基づいた思想の比較・変遷の研究が多く、⁷八世紀に書かれた全世界の哲学的・思想的・宗教的文献全体⁸といった巨大なテキスト群からその時代の精神史の動態(の一部)を見出すことはできるか、といったような(ある意味「世界思想史」を志向する比較思想学的な)問題設定はなされていない。しかし、漢字文化圏だけでなく『四庫全書』や『大正新脩大蔵経』など、膨大な文字数の叢書の全文テキストデータが利用できるようになっている今日、遠読的なアプローチは少なくとも技術的には可能になりつつあると言える。そこまでしないと、データベースで検索できるにもかかわらず、仏教以外の文献を検討対象にしないことについては、なぜそうしないのかについての説明責任が生じるようになってきている。DHによって、仏教学という領域の存立基盤もふくめた「原理的反省」が立ち上がってくるのであり、それは仏教学にとってむしろ大きなチャンスではないか

と思われる。

- (1) 比較思想学会の趣意書 (<http://www.jacp.org/about/prospectus/>) において「比較思想の世界思想史的意義」を謳うのは、研究方法による思想の表明のわかりやすさの実例ではないかと思われる。
- (2) 言うまでもなく、近代以降の日本の仏教研究は文献学としての「仏教史学」(法藏館、二〇一二年)のように近代における仏教史学の成立を思想史として捉えようという研究が進んでいる。日本近代仏教(史)学の成立については、本パネル登壇者の末木・下田の論考も参照。
- (3) 「文献学の哲学」として、ガダマーらに代表される解釈学の伝統を忘れてはならないが、日本の仏教学における解釈学への態度は消極的である。日本の仏教学界への解釈学の紹介としてはトーマス・カースリス「米国における道元研究と増大しつつあるハーメヌーティクス(解釈学)の影響」(駒沢大学仏教学部論集)一八、一九八八年)や長崎法潤「仏教解釈学」(『比較思想研究』一八、一九九二年)などがある。解釈学の応用を試みた日本の研究としては袴谷憲昭『唯識の解釈学——解深密経』を読む』(春秋社、一九九四年)をあげておきたい。
- (4) よく誤解されるが、実証主義批判は、研究における実証を否定するものではない。どのような研究においても文献等に基づく実証は不可欠であるし、各思想的伝統を(過度に)相対化することの問題もまた批判的検討される必要がある。
- (5) マルクス・ガブリエル「なぜ世界は存在しないのか」(講談社、二〇一八年)など。「新しい実在論」をはじめとする哲学の新しい動きと仏教をはじめとする「東洋」の哲学的伝統との親和性はすでに指摘されている。一方で「新しい実在論」等が主張する実在論はポスト構造主義ですでに提示されているとする論者もいる(大河内泰樹・斎藤幸平・宮崎裕助「多元化する世界の狭間で——マルクス・ガブ

- リエルの哲学を検証する」『現代思想』四六・一四、二〇一八など。
- (6) 師茂樹『論理と歴史——東アジア仏教論理学の成立と展開』(ナカニシヤ出版、二〇一五年)。
- (7) 船山徹『東アジア仏教の生活規則 梵網経——最古の形と発展の歴史』(臨川書店、二〇一七年)は、従来の仏教文献学による重要な成果であるが、その結論において「西洋的な仏教文献学」で言われる「二個人の頭の中にあつた、論理的に一貫する内容の著作」の復元という考え方は異なる方法を提示するに至っており(五〇五頁)方法論的にも重要である。
- (8) 北条勝貴「聖地をめぐる言説・儀礼・実践 藤巻和宏編『聖地と聖人の東西 起源はいかに語られるか』(勉誠出版、二〇一一年)。
- (9) S・トゥールミン、A・S・ジャンク『ワイトゲンシュタインのウィーン』(平凡社、二〇一一年)、ドミニク・ラカブラ『思想史再考——テキスト、コンテキスト、言語』(平凡社、一九九三年)。
- (10) ジョージ・P・ランドウ『ハイパーテキスト——活字とコンピュータが出会うとき』(シヤストシステム、一九九六年)など。
- (11) マリー＝ロール・ライアンは文学研究にコンピュータを用いるメリットの一つとして「方法論の鍛錬」をあげる。「方法論の鍛錬は、コンピュータが愚直であることそれ自体に端を発している。パートナーである人間の意図をこの機械は察することができないから、研究者が自分がなにを暗黙のうちに前提としているかをいちいち明示しなければならず、そのせいで自明性という口実の下に隠れているものが暴露される。……自明と思っていた知識をいちいち特記する骨折り仕事のおかげで、意味表象というものがどれくらい複雑かを計れるようになるし、文学批評の無根拠な思い込みにたいする解毒剤にもなるだろう。……コンピュータはご主人様の論拠に足りないところがあると、すぐにご主人さまの意志に反抗する。プログラマがよく言っていたとおり、『ゴミを入力するとゴミが出てくる』(『可能世界・人工知能・物語理論』水声社、二〇〇六年、二三頁)。
- (12) 下田正弘「比較思想と人文情報学」『比較思想研究』四四、二〇一八年。
- (13) 以下の議論は、拙稿「仏教文献とデジタル人文学…日本の事例を中心に」(『한글불교 문헌의 정본화와 확장성』二〇一七年)に基づく。
- (14) 柄谷行人は早くからこのような状況を哲学の問題として論じている。「フッサールは、二〇世紀の形式主義が、数学だけでなく、あらゆる領域に浸透せざるをえないことを察知していたといつてよい。それは今日ではコンピュータ科学や分子生物学に典型的にあらわれる。つまり、一九世紀の人たちが、最後の牙城として残しておいた精神、生命、詩といったものにそれが浸透するのである」(柄谷行人『隠喩としての建築』岩波書店、二〇〇四年、三八―三九頁)。
- (15) フランコ・モレットイ「遠読——『世界文学システム』への挑戦」(みすず書房、二〇一六年)。
- (16) 仏教学における同様の例として、以下の研究をあげておく。M. Bingenheimer, et al.: Social network visualization from TEI data, *Literary and Linguistic Computing*, Volume 26, Issue 3, 2011, 271-278, DOI: 10.1093/lc/lqf020
- (もろ・しげき、仏教学・人文情報学、花園大学教授)